

<p>Magical Mystery マジカル・ミステリー</p> <p>John Di Martino Romantic Jazz Trio ジョン・ディ・マルティーノ・ロマンティック・ジャズ・トリオ</p> <p>1. エピストロフィー Epistrophy（4:58）</p> <p>2. クリス・クロス Criss Cross（5:42）</p> <p>3. ベムシャ・スイング Bemsha Swing（4:46）</p> <p>4. アスク・ミー・ナウ Ask Me Now（5:56）</p> <p>5. リズマニング Rhythm-A-Ning（4:29）</p> <p>6. ラウンド・ミッドナイト Round Midnight（8:07）</p> <p>7. ウェル・ユア・ニードント Well You Needn't（3:15）</p> <p>8. パノニカ Pannonica（6:08）</p> <p>9. エロネル Eronel（5:41）</p> <p>10. アグリー・ビューティ Ugly Beauty（5:33）</p> <p>11. マジカル・ミステリー Magical Mystery~for Monk and Murakami〈J. Di. Martino〉（6:26）</p> <p>12. ブルー・モンク Blue Monk（5:54）</p> <p>13. イン・ウォークド・バド In Walked Bud（5:50）</p> <p>All songs by Thelonious Monk, except track 11 by John Di Martino This recording is dedicated to Thelonious Monk and Haruki Murakami</p> <p>ジョン・ディ・マルティーノ John Di Martino〈piano〉 エシエット・オカン・エシエット Essiet Okon Essiet〈bass〉 ヴィクター・ジョーンズ Victor Jones〈drums〉</p> <p>録音：2007年6月1、2日　ザ・スタジオ、ニューヨーク</p> <p>© 2007 Venus Records, Inc. Manufactured by Venus Records, Inc., Tokyo, Japan.</p> <p>*</p> <p>Produced by Tetsuo Hara & Todd Barkan Recorded at The Studio in New York on June 1 & 2, 2007. Engineered by Katherine Miller Mixed and Mastered by Venus 24bit Hyper Magnum Sound : Shuji Kitamura and Tetsuo Hara Artist Photos by Mary Jane Photography Front Cover :© Duncan Smith / Corbis Designed by Taz</p>

されるところがあったかもしれないけれど、僕が考えるロマンティックっていうのは、単に甘く聴きやすいというものではないんだよね。美しいアドリブを繰り返ろげながら、本物のジャズを創造してゆくのが、プレイヤーにとってのロマンなんじゃないかな。耳当たりの良いロマンティックでなく、本当のロマンティズムとはこういうものなんだということを、彼らの音楽から感じとってもらいたかったんだ・・

たしかに“ロマンティック・ジャズ・トリオ”の演奏には、甘さに流れない凜とした表情がある。軟弱なロマンとは一線を画した芯の強さと、表現に立ち向かってゆく確固とした意思のようなものが感じられるトリオの演奏。その意味で“ロマンティック・ジャズ・トリオ”は、グループ名とはうらはらに“硬派”のピアノ・トリオなのである。ピアニストのジョン・ディ・マルティーノは、フィラデルフィア出身で、名前からもわかるようにイタリア人の血を引いている。だからマルティーノが“歌謡的”ともいえるメロディックな資質をもっているのは当然のこと。いっぽうでラテン界の大御所、パキート・デ・リヴェラやレイ・パレットと演奏したり、アレンジャー、プロデューサーとしても活動をおこなってきたマルティーノは、きわめて幅広い音楽的視野をもっているミュージシャンである。そんなマルティーノが、ジャズ・ピアニストとして、思う存分に実力を発揮してみせるのが“ロマンティック・ジャズ・トリオ”であり、ジャズ表現の本質に迫ってみせたのが、この「マジカル・ミステリー」なのである。

このトリオでは、ジョン・ディ・マルティーノ以外のプレイヤーは、一定の

ジョン・ディ・マルティーノを中心とする“ロマンティック・ジャズ・トリオ”の「マジカル・ミステリー」は、その名のとおり、スリリングな中に限らない広がりをもつ不思議なジャズの魅力をいっばいに感じさせてくれる、興味深いアルバムである。サブ・タイトルに示されているように、ここではセロニアス・モンクのナンバーばかりが、マルティーノの手によってたくみに料理されている。あらためて言うまでもなくセロニアス・モンクは、モダン・ジャズの世界にあってもっともユニークなスタイルをもっていたピアニストのひとり。そのピアノ・スタイルと同じように、彼の手になるオリジナル・ナンバーの数々もまた、きわめて個性的な作風に彩られているものばかりである。幾何学的ともばれた、モンクの独特な作品の構築。そんなセロニアス・モンクのナンバーに、ジョン・ディ・マルティーノは新たな意匠をほどこし、ちょっと類をみないほどの斬新な感覚で聴かせてくれる。そのアレンジ手法は、じつにユニーク。今日的なセンスでアプローチをおこなってみせるのだが、生み出されたものは“これぞ21世紀のモンク解釈”といえるほど、フレッシュな輝きをもつものになっている。

セロニアス・モンクの音楽には、当たり前解釈が通用しない。作品そのものが個性的である上に、ハーモニーやリズムがジャズの本質を射抜いたものであるだけに、演奏者にはきわめて真摯なアプローチが要求されるのである。月並みな演奏方法では、まったく魅力のないものになってしまう危険を常にはらんでいるのが、セロニアス・モンクの音楽なのだ。ここでのジョン・ディ・マルティーノは、まさに全身全霊をこめてモンクの音楽に取り組んでいる。モンクの音楽に真正面からぶつかり、その本質にまで分け入ってモンクを再創造しようとするマルティーノのチャレンジ精神。そこから生まれたものが、セロニアス・モンクの音楽であると同時に、まぎれもないジョン・ディ・マルティーノの音楽になっているのが、なんととても素晴らしいところである。モンクの作品について、ジョン・ディ・マルティーノはこんな風に言っている。“僕たちは、みんなセロニアス・モンクの音楽が大好きなんだよ。モンクの音楽は、ちょっととっつきにくいと思われているかもしれないけど、彼のオリジナルには美しい曲がたくさんある。ひねりが効いているから、ちょっと見てもわからないかもしれないけれど、モンクの作品の本質はビューティフルの一語に尽きるね・・・”。たしかにモンクの音楽は、きわめて論理的で、いっさいの虚飾を排してジャズの本質に迫るようなところがある。シンプルでありながら、不可思議な響きに彩られているモンクの音楽。いまなおモンクの作品が多くのミュージシャンたちのイマジネーションを駆り立てているというのも、彼の音楽が時代を超えてアッピールする魅力をもっていることとの、何よりの証左なのだろう。

それにしても“ロマンティック・ジャズ・トリオ”の音楽性の幅広さにはびっくりさせられる。デビュー・アルバム「甘き調べ」や「ソー・イン・ラブ」で、スタンダード・ナンバーにラテンの名曲を織りまぜて、まさにグループ名とおりの、哀感あふれるロマンティックなサウンドを前面に押し出していた“ロマンティック・ジャズ・トリオ”。つづく「ミュージック・オブ・ザ・ナイト」でブロードウェイ・ミュージカルのナンバーばかりをとりあげたマルティーノは、一転「モーツァルト・ジャズ」でクラシックのメロディーばかりをジャズ化するという試みをおこなってきた。そのあとに、この大胆なセロニアス・モンク集である。このレパートリーの多様さ、振幅の広さは何なのだろう。このことについて、アルバム・プロデューサーの原哲夫氏が、こんな風に言っている。“ジョン・ディ・マルティーノと話していると、さまざまなアイデアが出てくるんだ。そんな中で、そろそろやってみようかという感じで、モンクの作品ばかりを演奏するアイデアが出てきた。もともとロマンティック・ジャズ・トリオという名前は、僕がネーミングしたものなんだ。それで、誤解

メンバーではない。ベースのエシエット・オカン・エシエットはピアニスト、ダラー・ブランドとの共演やアート・ブレイキーのブルージアナ・トラリアングル、90年代半ばのブルーノート・オールスターズなどでも活躍してきたプレイヤー。その強烈なベース・ビートは、いちど耳にしたら忘れることができないほど、鮮烈な個性を放っている。ドラマーのヴィクター・ジョーンズは、70年代からルー・ドナルドソン、スタン・ゲッツ、ディジー・ガレスピーらジャズの巨人たちと共演するいっぽう、R & Bからアシッド系ジャズにいたる幅広いバンドでプレイをおこなって、その実力をアッピールしてきた。エシエットにしてもジョーンズにしても、純粋にジャズだけをプレイしてきたミュージシャンではないところがポイントで、そんな彼らの自由なビート感覚が、ここでもきわめてフレッシュな響きをもたらすことになっているのが聴き逃せない。

オカン・エシエットの圧倒的な存在感をもつベースによるビートからスタートする<エピストロフィー>。もともと面白い音の跳躍をもっているテーマであるが、ジョン・ディ・マルティーノはまったく新しい意匠をほどこし、このトリオのリズミックな冒険性を際立たせてみせる。マルティーノのピアノとエシエットのベースの対話は、まるでパズルのよう。モンクならではの論理的な構造を、さらに自在かつ大胆に発展させてゆく“ロマンティック・ジャズ・トリオ”の手法が鮮やかだ。この演奏は、誰よりもセロニアス・モンク自身に聴かせたい。モンクが耳にしたら、おそらく快哉を叫んでくれるに違いない。録音の良さも特筆すべきものがある。“いつもヴィーナスのアルバムは、プレイヤーの気持ちがダイレクトに伝わってくるようなりアリティ重視の音作りを心がけているんだけど、このトリオのメンバーたちは皆、必要以外の余分な音を出さないんだよね。だからサウンドそのものが良く響くし、仕上がりもとても良いものになっていると思う”とは、ふたたび原プロデューサーのコメントである。ボサ・ノヴァとアフロをミックスしたような、現代ラテンの最先端ビートで演じられる<クリス・クロス>。浮き立つようなアフター・ビートが強調された<ベムシャ・スイング>。そんな彼らのビート感覚とモンクのテーマが見事なブレンドをみせているのが、なんと興味深いところである。いっぽう有名な<ラウンド・ミッドナイト>では、高雅な抒情をたたえたマルティーノの美しいピアノ・タッチを耳にすることができる。モンクの作品の中でもダークな色彩を放つ<アスク・ミー・ナウ>を、優雅なワルツで演じるという楽しいアイデア。<アグリー・ビューティ>はもともとワルツであるが、これもたっぷりと抒情美をたたえた演奏で、どこまでも深く沈んでゆくようなマルティーノのタッチから、むせかえるようなモンク・カラーが立ち込めてくる。これぞ音楽の本当のロマンというものだろう。

そんなモンクのオリジナルの中に、ただ一曲挟まれているのがジョン・ディ・マルティーノのオリジナル<マジカル・ミステリー>である。彼のメロディックなセンスがよく出ていると同時に、モンクに相通じる思索的な面も顔をのぞかせるナンバー。アルバムの中でこの一曲にまったく違和感がかんじられないというのも、見事にモンクのコンセプトに同化しているということなのだろう。最後にジョン・ディ・マルティーノは、このアルバムをモンクとともに、やはりサブ・タイトルにあるように、わが国の作家の村上春樹に捧げると言っている。マルティーノは村上の作品を好んでいて、ほとんどがアメリカで英訳されているのだが、特に短編が大好きなのだという。“マルティーノのM、モンクのM、村上のM。語呂合わせみたいだけど、スタジオでの僕の感性を合わせると、こういうことになるのかな”と屈託なく語るマルティーノに、アルバムに寄せる充実感と彼の自信のほどをみる思いがした。

岡崎 正通